

4. 本小委員会は海洋学データをメンバー政府に、次のように利用できるようにする。

- a) メンバー政府に現存データ・センターの施設について周知せしめる。
- b) メンバー政府にデータ・センターの内に、彼らの海洋学データの写しを預けおくことを奨励する。

(宇田道隆記)

18. イワシ族魚類からの蛋白質生産の科学面に関する世界会議

(World Meeting on the Scientific Aspects of
Protein Production from Clupeoid Fishes)

[1963年6月 米国ワシントン]

人類栄養不足の主面は蛋白欠乏と、特にある必須なアミノ酸の欠乏である。(a) 10億前後の人々がある程度不足し、その半数が病気が死亡という程度に悩んでいる。(b) 魚蛋白はこれらアミノ酸の優秀な比率のものを、人間の食物要求に対し付与する。(c) 陸からの動物蛋白生産の問題は、特に人間蛋白不足が主要問題なる世界のこれら地域で、重要実質的なもので、大量漁類資源はしばしば付近水域に利用できる。人類の用いる海からの動物蛋白の、主な現在の生産者は、イワシ族(カタクチイワシ、ニシン、マイワシ等)の魚である。蛋白不足の病気が特に顕著な発達する世界の区域に隣接して、存在することの知られる余り用いられない。極めて大きな資源のあることが知られている。

1. イワシ族ポピュレーションは、自然的諸原因からその数量に、ひどく広汎な変化を受けている。ノルエー鯨は800年以上の記録があるが、大きく数量の消長があり、最近年でもその年々生産が、120万トンから10万トンの間を動いている。この大変動の理由はわかっていないが、物理環境における長年変化から起るものと感ぜられている。

この解明は、この大変動が実際に、経済的・政治的に広い違和を生じ、以前の何世紀の間にノース・シー（北海）方面に、戦争すらおこすほど強大であった事実からも最も重要である。これらの解明は、海洋生物学、物理的、化学的、海洋科学、海洋気象学の合せた資源を要求する。これら海洋学分科の開発はごく最近に実施できるものになったプログラムに連関する。

2. 海洋中のオ一次食糧生産力の残りに、密接して立つイワシ族は、海洋中の生物網を通して植物生産から太陽エネルギーの移譲に必須のものとする。この蛋白生産に本質的なエネルギーの転換のメカニズムはよくわかっていない。

3. 証拠は特に、カリフォルニア沖のカタクチイワシの資源に関して、人間が一大量魚種をおさえるに十分な、海洋の生物群聚の生態学的バランスに影響すること、かくすることにより、競争的利益を他のものに十分に与え、その区域の生態学的バランスを深く攪乱し、必ずしも人間の利益にならない。こうしてイワシ族により供与された生態的問題は、多分海の生物資源の力学と利用に広大な意義あるものであろう。

4. イワシ族の濃群習性と解剖は、数量、居場所と両方の変化に関して、確定せらるのを特にわかりやすくする。近年発達した音響測深技術によって、詳細は精巧化し得られる。

5. 大きな余り用いられないイワシ族魚類の資源が、西アフリカ沖、アラ

ビア海、ベンガル湾に在り、その他大きな生産的工業の建設に適する、
確かな商業的数量の場所が、更に海洋学的情報の適用と新知識の獲得、
その海と資源の理解を待っている。このことは部分的には、国際インド
洋調査、熱帯大西洋国際調査、その他100の国際海洋調査により与え
られる。

6. イワシ族を人間の直接にうけとれる、蛋白質にかえる科学と技術は、
複雑な生化学、処理技術、経済、衛生学及び社会学の問題を含む。
これらの問題をFAO, UNICEF, WHOで研究している。

7. 熱帯イワシ族の分類学的関係は余りわかっていない。開発されている
魚の資源力学研究に必要なストックのレベルよりずっと低くしか知られ
ていない。

(宇田道隆記)

19. 国連低開発地域の為の水産資源と生産(海洋漁業及び 内水面等)科学技術会議

(1962年12月11日)

同会議事務総長報告

主問題と発展 -- 一般

1. 2. 3. 4. 5. 6.	North Sea, Baltic Sea	Lake Victoria	Kovarirnde
	24 lb.	4 lb	per acre per annum
	Gulf, Lake Edward, Lake George	42, 55, 104 lb per	acre annually

20. 世界の魚のCatchは最近10年間以上にsteadyな、おそらく加速
的な生長率を示す。1957~61年の全世界の魚族生産高は